

# 被災地

## トピックス

「電気のあるさと」では、復興に向けて奮闘する皆さんや、故郷への帰還に向けて歩む皆さんの近況を、折に触れて全国の電源地域の皆さんにお伝えしていきます。

### 復興へ確実に歩みを進める女川町

#### 「マリンパール女川」が 女川町・浦宿に復活

かつての女川町を知るものにとつて、町の高台から見る「3・11」以降の光景には、胸に突き刺さるような痛みを覚える。

3月中旬、横倒しになったビルの横にかろうじて残り、現在解体が進められている茶色のビルが、かつての「マリンパール女川」だ。平成6年の開館以来、女川町の観光・物産販売の拠点として親しまれていた。館内は「シーパル1」と「シーパル2」に別れ、「シーパル2」には16店舗



復活した「マリンパール女川おさかな市場」

の鮮魚、水産加工品、レストランなどが入り、毎月行われていた「サンマ祭」や「ホタテ祭」といったイベントには町内外から多くの人々が訪れていた。しかし、「3・11」の大津波は高さ20mの5階建ての建物を飲み込み、躯体は残るも建物内部は壊滅的な被害を受けた。行方不明者も出て、16の事業者は全国に散らばり「マリンパール女川事業組合」は解散寸前にまで追い込まれてしまった。

その「マリンパール女川」が国道398号線・通称女川街道沿いに復活した。オープンは昨年10月7日。石巻の会社が所有する廃業したドラ

イブインの建物を借り受け、突貫工事で改装したものだ。建物内は6事業者のコーナーに鮮魚や加工品が並び、町内外からの買物客で賑わっている。かつての「マリンパール女川」に比べれば数十分の一面積だが、客引きの音が響き渡り活気がみなぎっていた。



宮城県



店内には鮮魚や水産加工品が並び

「私を含めそれぞれ事業者の皆さんは、資金的にも無理して再開しましたが、やってよかった。思っていたより多くのお客さんに来ていた

「新鮮な魚が食べたい、という町民や周辺の住民の声もありましたし、さんまが水揚げされる時期に、なんとしても再開したかった」と「マリンパール女川事業組合」の山田雅裕理事長は語る。被災後、再開の場所や時期を探っていたが、女川町内に現在の場所が見つかり、毎年10月に開催していた「サンマ祭」には、町の内外から多くの買物客に来ていただいていたので、この時期に事業を再開すれば必ず軌道に乗るという読みもあった。

「再開に至るまで全国各地のバス会社などに営業に行きました。その

「再開に至るまで全国各地のバス会社などに営業に行きました。そのかいもあったようで、被災地応援ツアーなどでかなり来ていただいています。この夏には被災した町を見ていただくツアーも企画しています。とにかく、応援していただいている全国の皆さんのためにも頑張りたいと思います」と山田理事長は語る。

「再開に至るまで全国各地のバス会社などに営業に行きました。そのかいもあったようで、被災地応援ツアーなどでかなり来ていただいています。この夏には被災した町を見ていただくツアーも企画しています。とにかく、応援していただいている全国の皆さんのためにも頑張りたいと思います」と山田理事長は語る。



解体が進められる女川町のビルの残骸。奥の茶色いビルがかつての「マリンパール女川」



「女川町大漁獅子舞」のメンバー



焼サシマ2,000本が振舞われた



女川町で行われた「焼サシマ」のキャラクターショー

## 若手メンバーが絆を強めた 「女川町商店街復幸祭」

大震災から1年の3月18日、女川町総合グラウンドで「女川町商店街復幸祭」希望の鐘を鳴らそう」が開催され、町内外から約1万人の人の出で賑わった。

女川町漁協青年部をはじめ水産加工業者や食品店、各種まちづくり団体の26の屋台が立並び、体育館の特設ステージではアーティストやタレント、女川町商工会のキャラクター「イーガー」のショーなどが繰り広げられた。2,000匹の「焼サシマの振舞い」や、「海産物のすくい取り」なども行われ、「鮮魚と水産

加工品のまち・女川」を堪能する一日となった。

主催は「女川町商工会」。協力は「女川町」「女川町商工会青年部」、そして「水産加工研究会」「女川福幸丸」「金曜会」「女川さいがいFM」など、若手で構成するまちづくり団体やボランティア団体。後援には「女川町観光協会」、運営協力に「仙台放送」と「横浜南部市場」、石巻市内や町内を巡るシャトルバスの運行に「黄金バス」も協力した。まちづくりに関わる女川の若手メンバーが一堂に会して、この「復幸祭」を企画・運営するものとなった。

「復幸祭」の企画が持ち上がったのが昨年の12月ごろ。かつて女川駅前ロータリーにあった『からくり時計』の4つの鐘のうち2つが、瓦礫の中から発見され、そのうちの1つは健全な状態にあり、この鐘が「希望の鐘」と名づけられたことが、イベント開催の契機となった。

町内の商工会若手メンバーが集まり「震災前、私たちが誇りを持っていた『女川町の結末』をもう一度取り戻し、この『希望の鐘』を鳴らそ

う」というのが始まりだった。財源は経産省の「地域商業活性化補助金」を活用。再建を目指す自らの家業の合間をぬって、開催に至るまで連日の協議を重ねた。

「本当に、若手メンバーが頑張りました。もともと女川町は町民の結束が強い町ですが、これを機にさらに『絆』が強まりました。自らが企画・運営に携わったことで若手メンバーの間に復興へのモチベーションはかなり高まったとように思います」と「女川町商工会」の青山貴博あおやま たかひろ主幹は言う。

本年1月、町内の30の企業・団体

## 「3・11ふくしま復興の誓い2012」が 福島県内各所で開催

「3・11」から1年、東北の被災各地で追悼の集会が開かれたが、福島県では「3・11ふくしま復興の誓い2012」と題し、追悼式及びシンポジウムや各種イベントが福島市をはじめ県内の7ヶ所（福島市・郡山市・白河市・会津若松市・南会津町・南相馬市・いわき市）で開催された。

中心会場となった福島市の県



が組織する「女川町復興連絡協議会」が町と議会に向けて独自にまとめた「女川町復興計画」を提出した。これは、町が策定した「復興計画」を基に、商工業者が連携しながら、町に対して復興を目指す様々な提案を行うもの。その中で「100年後も人々が住み残る、住み戻る、住み来る町」という理念を掲げた。

そうしたなか開催されたこの「復幸祭」は、女川町の復興に向けて「商工会青年部を中心とした若手メンバー」がその先頭に立って歩む」という「心意気」が十分に感じられるものであった。

北会場では、第1部の追悼式のあと、第2部において「復興の誓いシンポジウム」が開催され、佐藤雄平県知事から全世界に向けて「ふくしま宣



絵や言葉でメッセージが込められたキャンドルが園内に敷き詰められた、いわき市会場



いわき市成沢・入敷青年会、小名浜じゃんがら踊友会による「じゃんがら念仏踊り」

軽度の知的障害を持つ被災者による詩「海をうらまない」を読む飯島晶子さん

いわき市の会場でも、追悼式の後、市の中央にある「平中央公園」にステージが設けられ、被災者の詩の朗読のあと、「阪神淡路大震災」で被災した神戸市から分灯された灯りが311本の竹筒に灯された。その後、市立平第3小学校の吹奏楽部の演奏や沖縄県沖縄市の久保田青年会による「沖縄エイサー」、いわき市無形民

言」が発表された。第3部は屋外の会場で各種のイベント・ステージプログラムが開催され、その後、東日本大震災の犠牲者を悼むと同時に、復興への「希望のあかり」として1万本の筒に入ったキャンドルが灯された。

俗文化財でもある「じゃんがら念仏踊り」などが演じられた。この日は、気温が低くあいにくの小雨模様となったが、園内いっぱい「頑張ろう！福島」や「負けねぞ！福島」といった被災者の思いがそれ

ぞれに描かれた『希望のあかり』5,000本のキャンドルが敷き詰められ、公園内は荘厳かつ幻想的な雰囲気包まれた「追悼の一日」となった。

「いっしょを歩こう、田舎をめぐろう。」東北観光博が開催

平成24年1月30日からプレ実施されていた「東北観光博覧会」が、3月18日に本格実施の運びとなった。東北地域全体を一種の博覧会場と見立てて、3・11以降大きく落ち込んだ東北地域への旅行需要の喚起を目指しているが、中長期的には、地域が主体となった新たな観光スタイルを実現するために官民を挙げた一体的な取組みを目指している。具体的には東北地域への送客を強化するとともに、主要な観光地域28ヶ所を核とする「ゾーン」を設定して「観光案内人」の配置や地域独自の観光コンテンツの提供を行い、地域が主体となった持続的な取組みの定着を図ることとなる。



仙台駅に設けられている「総合サービスセンター」

それを描かれた『希望のあかり』5,000本のキャンドルが敷き詰められ、公園内は荘厳かつ幻想的な雰囲気包まれた「追悼の一日」となった。

それを描かれた『希望のあかり』5,000本のキャンドルが敷き詰められ、公園内は荘厳かつ幻想的な雰囲気包まれた「追悼の一日」となった。



「東北パスポート」と公式ガイドブック。各地に設けられている「旅のサロン」を巡って記念スタンプを押すスタンプ帳。スタンプの数によって特典が提供される。また、「東北パスポート加盟店・施設」でパスポートを提示すると、サービスや特典、割引などが受けられる

実施体制は、国土交通大臣を長とする「東北観光博実行委員会」のもとに、各ゾーン運営協議会が設置され、実施していく。実行委員会のメンバーには東北6県の知事や、日本経済団体連合会、日本商工会議所、経済同友会、東北経済連合会など民間の団体も参加している。実施期間は平成25年3月末まで。詳しくは「東北観光博ポータルサイト」：<http://www.visitjapan-tohoku.org/>。